

先輩たちの報告書から 台湾派遣をお薦めします！



台湾派遣 日程表 (2017 年度例)

<台北市内>台北東京国際飯店宿泊 (2泊)		
1	3/8 木	07:40 羽田空港国際線出発 3階近畿日本ツーリスト団体カウンター前集合 09:20 NH (全日空) 851 便で台北松山空港へ 12:30 松山空港着。ガイド出迎え。マイクロバスにて移動 故宮博物院、忠烈祠 (衛兵交代・壁画等見学)、関帝廟 17:30 ホテル到着。チェックイン 18:10 近隣のホテルにて夕食
2	3/9 金	08:45 ホテル出発 グループ行動 雙連駅→中山記念堂、台大医院、二二八公園、総統府 18:15 ホテルに集合、 18:30 ホテルの徐社長の日本留学時代の話 (～19:30) 20:00 士林夜市で夕食。
3	3/10 土	08:30 ホテルチェックアウト。台北駅へ 09:55 自強 117 号で台北駅出発 (車中昼食) 13:02 斗六駅到着 13:10 スクールバスにて大学へ 13:30 チェックイン 14:00 アイスブレイキング・交流ゲーム 17:30 市内で夕食。斗六夜市 20:30 帰館
4	3/11 日	07:00 ロビー集合 07:15 貸し切りバスで出発 07:30～08:15 地元レストランで台湾式朝食 10:00 烏山頭ダム、北回歸線、嘉義 (城隍廟、営林署跡)、 19:00 帰館
5	3/12 月	09:00～09:20 校長室表敬訪問 09:30～10:55 歓迎式、自己紹介等 11:00～15:00 台湾日帰り研修のためのグループ学習 15:00～16:30 現地企業訪問 旭硝子顯示玻璃股份有限公司(AGC Display Glass Taiwan Co. Ltd.) 斗六第一工場
6	3/13 火	07:30 台南へ日帰り研修出発 グループ行動 20:15 斗六集合 学校へ戻る。
7	3/14 水	08:45 ロビー出発 午前 講義 (張李曉娟先生・揚靜院長) 午後 幼児保育科見学と蔡佳珉先生との懇談 18:30 さよならパーティー 19:40 ビデオ/ 日本側感想/ 台湾側感想/ 終了書授与 20:30 写真撮影
8	3/15 木	10:00 スクールバスで出発、斗六駅へ 10:41 自強 116 号斗六駅発 13:50 台北駅着 14:50 松山空港着。搭乗手続き 16:50 NH854 で出発 20:40 羽田空港到着 到着後、ロビーにて解散

Challenge!!

大学1年生

台湾派遣に応募すると決めたときから、私のチャレンジは始まった。

自分の中での価値観や視野を広げるために、日本とは違う国での生活や文化を自分の目や肌で感じてみたい、日本にとらわれることなく、世界目線での物事を考えられる人になりたい。そういう思いで期待と楽しみでいっぱいだった。しかし、中国語は大学の授業を取っていたものの、積極的ではなかったためほとんど勉強しておらず戦力外。かといって英語も対して話せないため、言語、コミュニケーションの面での不安は大きかった。この派遣が異文化交流に重きがあることを鑑みるとなおさらだった。

事前研修を重ねるなかで、台湾の人々が一般的に親日と言われているのはなぜなのか、を考えるようになった。講義の中で両国に関する歴史や現地情勢、文化を学び、きっと植民地時代やその後の歴史が関係しているんだろうなと思った。しかし、それは若者の親日とは少し違うような気がした。若者はむしろ、植民地にされていた、という負の歴史に捉えている側が多いのではと思ったからだ。若者の親日は歴史から生まれたわけではなく、日々の生活にあふれているものから生まれたものだと考えついた。アニメや食など、日常生活で見られるものが関係しているのだろうと。そこで私は、台湾の人々が知らない日本の文化を伝えたい、もてなしたい、と思うようになった。しかし、それは決して簡単なことではないことも同時に悟った。そもそも日本人と台湾人では考え方や好みも違うため、日本にあるものをそのまま持ち込んでも広まるかどうかは難しいと感じた。そこで、まずは台湾人が一般的に好む特徴を列挙し、それをヒントに日本にあるものを探そうと決めた。ジャンルは、日々の生活にかかせない食文化にすることに決めた。日式料理のように、日本料理の味を変えて台湾で広めるのではなく、日本料理としてそのまま伝える、という方針に決まった。

台湾現地に着いて、まず台北市内視察から始まった。博物館や寺院、台湾の激動の時代

に関する場所など様々なところに行ったが、特に、自由行動で行った西門街では、日式料理で代表とされるラーメンを実際に食べてみた。どの面から考えても日本のラーメンとは違ったが、特にスープの味の違いには驚いた。うどんスープのようなだしのスープで台湾人はラーメンを食べているのを知り、少しショックを受けた。台湾人が、これを日本料理のラーメンだと思って食べていることを考えると、ショックだった。しかし、同時に、日本料理を日本料理のまま台湾人に伝えたいという思いがとても強くなった。また、二二八記念館では、日本統治時代、日中戦争からの第二次世界大戦、そして二二八事件、と、台湾の激動の時代を学んだ。日本と台湾の間に挟まれていた当時の台湾人の様子や苦悩は計り知れないものであったことを再認識した。

そして3日目からは斗六に移動して、環球科技大学の学生との交流が始まった。コミュニケーションの面での不安を抱いたまま台湾入りをしたわけだが、この不安がついに現実のものとなった。このコミュニケーションの難しさは言語の習得の程度というよりは、母国語の違いによるものから生まれたと思う。同じ英語を話しているはずだが、中国語と日本語それぞれの訛りが英語に出て、聞き取りづらいようなことが多々あった。さらには、パートナー2人の中国語以外に話せる言語がそれぞれ異なっていたため、3人で話す場面では言語の壁を感じざる負えなかった。しかし、言語は話して伝えるためだけではなく、互いに互いの言語を教えあうことで会話のきっかけともなり、すなわちコミュニケーションの一つである、ということに日に日に気づき始めた。大学内での歓迎会で中国語での自己紹介をすることもあり、たくさん教えてもらったと思う。これは自信にもつながったため、堂々と中国語で自己紹介ができた。

また、パートナーたちとの交流の中で、探求の内容も含め日本の文化について話す機会があった。私は日本の文化や風習に関してはわかっているつもりであった。自分の国の

ことであるため、いつ何を聞かれても答えられると思っていた。しかし、いざ聞かれたときにうまく説明できない場面が多く、自分の理解不足を感じた。たとえば着物と浴衣の違いについてだ。日本人にとっては両者には着る季節や場面、織物の素材など異なる点があるため、両者は大きく違うことが容易にわかるが、台湾人にとっては見た目も大差ないため、二種類の呼び名があると思っていたようだ。台湾の文化を理解するには、まず自国の文化を理解することが必要であった。日本の文化をうまく説明できなかったとき、とても悔しい思いをした。

両国の文化の話題として、パートナーとの会話で遊びについて話したことがあった。その中で、日本でよく知られている手遊び「わりばし」が台湾にもあることが分かった。これは統治時代の影響なのか戦後の日本文化の浸透なのかはわからなかったが、共通の遊びがあることに驚いた。パートナーと遊んだ「わりばし」は心から楽しむことができた。日本に帰ってきて思うことは、たくさんの

ことにチャレンジした一週間だったな、ということだ。そこにはパートナーをはじめとして同じ派遣団員など、様々な人の力添えがあったからであって、日本でも台湾でも変わらない人情の温かさを感じることができてうれしかった。台湾を離れる時も、寂しい気もちもある中、万国共通の笑顔で見送ってくれた。台湾入りしてから英語も中国語もほとんど話せずうじうじしていた自分、不安なことがあってもなかなか言い出せなかった自分、聞いてみたいことも遠慮して聞けなかった自分、ずっと殻に閉じこもって味のない日々を送ろうとしていた自分。そんな自分を変えられた台湾派遣だったと思う。この派遣は、私にチャレンジする勇気を与え、背中を押してくれた。これからはこの挑戦する気持ちを大事にしていきたい。そして、この経験をさせて下さった台湾、そして世界に、いつか何かの形で恩返しをしたい。



終わらない国際交流を掲げた五年の果てに

大学 2 年生

小山台教育財団の海外派遣に参加させていただいたのは今回で 2 度目である。1 度目は高校 1 年生の時の英国語学派遣だ。そして 2 度目は今回の台湾派遣だ。基より英国語学派遣を経験した後、台湾派遣に参加したいと強く思うようになったのである。

そのきっかけと言えるのが、初回の語学派遣の時に自身が掲げた願望である「終わりのない国際交流がしたい」ということであった。当時は英語圏で、世界各国から同じように留学生が学びに来ていることもあり、もちろん喋る言語は英語であった。よって、英語はツールであることを前提に様々な国の人と話し交流をすることで現在も連絡を取り合う関係を築くことが出来たのである。

ここでは、英語圏の人であったり、英語を学びに来ている人であったりしたからこそ英語を使うことでコミュニケーションを取ることが出来、終わりの無い国際交流を実現することが出来たのであろう。

一方で、英国語学派遣から帰国後考えさせられたことがある。それは、英語が通じない人とはどの様に国際交流をすることが出来るのか、どの様にしたら帰国後も連絡を取り続けることが出来る関係になるのであろうかと云ったことである。

実際台湾の大学に行くと言語の壁にぶつかってしまった。なぜなら、日本語も、英語も喋ることが出来ない人がいたからである。相手のことを知りたくて英語で質問をしても理解してもらえない状況の中でどのようにコミュニケーションをとっていたかと云うと、ジェスチャーである。後は、共通の話題になりそうな洋楽を流し、共に歌うなど言葉を発しない意思疎通の仕方が一つの例として挙げることが出来ると考えた。

しかしながら、英語で話せる人がいたとしてもお互い分からない単語や言い表すことが出来ない表現は存在したのである。この場合簡単な表現で応用したり、写真を見せたり、翻訳を使ったりすることでお互いの理解を深めることが出来たと感じた。

例え言語が通じなくとも、共に笑い共に遊び共に行動をする中で友情は育まれることを実感しそのような状況下、意思疎通を図ることが出来る喜びを感じることもできたのである。

一方、果たして上記の様なアプローチの仕方だけが終わることの無い国際交流へと繋がるのかを考えた結果、自身で出した答えは“no”であった。英国派遣に行った時に、現地を盛大に楽しむことが出来た根幹である「郷に入っては郷に従え」を実行していないことに気が付いた。私はあくまでも日本人であり、本土では無いからこそ自分から進んで行動するのではなく、現地の人が自然と話してくれることに対し耳を傾けるだけであって、現地ならではのしたいこと、挑戦したいことを積極的に申し出なかったのである。

また、現地に溶け込む為には喋ることが出来なくとも積極的に相手の言語を聴き、自身も活用していくことでお互いの会話が促進され距離を一気に縮めることが出来た。

そこで言語が通じない人と国際交流はどの様にするべきか、あるいはどの様に在るべきかを台湾派遣を通し考えた。言語が通じずともジェスチャー等によりお互いの距離を縮めることは出来き、楽しいと云った万国共通な点は必ず有る為、意思疎通を図ろうとする手段は無数に有る。よって、言語に縛られることなく、どこの国の人であれ分かり合えるといった結論を出した。同時に自身は、前述したことを踏まえた上で国際交流の在るべき姿というものは、お互いの国や人種に興味を持つことで、他国や現地の言語を主体的に学ぶようになり、結果的に言語といった支障を乗り越え、共通の言語が持つニュアンスを正確に汲み取ることで双方の真の意図の理解や他国についての理解を深める所にあるのではないかと考える。

想いなどは国境を超えることを身に染みて体感したため、言語は関係ないとの結論を出したくなるが、言葉が通じるに越したことは無いのである。だからこそ、学ぼうとする

努力伝えようとする努力に加え母国語以外を喋ろうとする努力は続けなくてはならないと実感した。

上記のことに派遣中気が付き日々の反省と努力を続けた結果、より円滑なコミュニケーションをとることが出来、非常に充実した国際交流の場となったのである。

台湾派遣全体を通じ終始感じていたのは初めて派遣に行ってから5年後にこうしてまた海外派遣に参加している訳だが、自分が当時海外へ行き何がしたいかを考え、目標が達成できれば良いと思っていた。しかし、台湾においては私が以前と同じ願望を抱いていても、もう既に先人が同じことを伝えてくれていたため、日本人として伝えなかったことは日本人と関わったことがある人のみならず台湾に伝わっていたという喜びを感じ取れたのである。

英国派遣に応募する時の作文の課題は「最近一番関心があったこと」であった。そこでは日本人の見返りを求めない精神が巡り巡って結果的に他国が日本を助けてくれることになった事例を挙げ、日本人の持つ「美しさ」を派遣に行くことで伝えたいという願望を記した。日本人の持つ美しさとは、サービス精神（見かえりを求めない精神）やおもてなしの心だと自身は思う。

第一、日本とはどういう国かと外国人に問うと「良い国」と述べているケースが多いが、治安や他の要因以外にも日本人の持つ美しさに惹かれたからではないかと考える。そのため、今回も伝えたい、大切にしたいと思っていた。

願望を抱き台湾へ行き、始めに心を打たれたのは、台北で宿泊した「東京国際飯店」と云うホテルでの出来事であった。なぜならば、従業員全員の宿泊者への気遣い、サービス精神が非常に行き届いていたからである。ロビーに降りると声を掛けて下さったり、当日の気象情報や、行先の現地の人ならではの情報を教えて下さったり、何か不具合が生じた時に快く対応して下さったりしたのである。日本での留学経験を持ち日本人の精神に感銘を受けたホテルの社長さんとお話しをしてくださった中で、分かったのは、このような気遣いやサービス精神は従業員に徹底させているということであった。しかし、ビジネスとして教えを守っているのではなく、心から従業員が見返りを求めないで相手の為に尽くす（ホテル事業の域を超え、どの様な要

望であれ答える）ようになる様な組織作りをしていたため、従業員への待遇も画期的であった。

このような良い循環が魅力的であったと感じると同時に、日本人の持つ美しさが実際に日本に来た人に伝わり、途切れることなく自国でよい風習として引き継がれていることに対し、非常に感銘を受けた。

私は、今まで伝えるだけ伝えて、理解してもらえれば良いと考えていた。伝えた良い文化を自国に取り入れてもらえる希望は実際にはほんの少しであると思っていたからだ。しかし、世の中にはまだ決めつけてはいけないうことが多く存在し、可能性は無限であるとも思えた。伝えることで、結果的に行動を起こしてもらえる可能性があると思い今後はもっと国際交流の領域を広げていきたい。

また、台湾ではどこに行っても日本人と分かると日本語で挨拶をしてくれる人が多かった。ただ、お寺を歩いていても英語も日本語も喋れないにも関わらず、簡単な英単語だけを並べてコミュニケーションを取ろうとしてくれた。お店の人に道を聞いた時も日本人だと分かると微笑みながら営業中にも関わらず目的地まで連れて行ってくれたという温かい待遇を受けたのである。

おもてなしの精神が日本にはあると思ってきたが、台湾人がしてくれたようなことを果たして日本人は行っているのであろうかという疑問を感じたのはおそらく台湾人が日本人より日本人らしいからであろう。

日本は台湾との深い関りを経て大きな痕跡を台湾に残したと思っている。しかし、伝えたものは、その国ごとに温められより良い形となることが分かったため、今までは、他国の良い所を待ちかえり自国の発展に繋げることが出来たらよいと考えていたが、終わりの無い国際交流をする意味は、更にその後、自国に持ち帰り育んだものを伝え返すことで、自国を多様な方向から見つめ直しよりよい発展へと繋げることにあると考えることができた。よって、今回の台湾派遣は自身が5年前に自分に問いかけた自分が思う国際交流の意義を見つけることが出来たことから、この五年間の集大成でもあると言える。

台湾も大好きになり、国際交流の楽しみも味わえたため、どの様な形であれまた自分で機会を作り台湾に行きたい。そして、台湾で出来た友達にも会いに行きたい。

コミュニケーションを磨く方法

大学 2 年生

ここでは、僕が台湾派遣の参加に当たって立てた 2 つの目的、

1. その土地や文化、人々と親しむ経験をする
2. 台湾が親日である原因や理由を知る

以上に即した成果、反省、改善策を述べた上で、今回の台湾における僕なりの成果をまとめる。

1. の達成度については、台湾の土地や文化に親しむ経験は十分、台湾の人々と親しむ経験は不十分だったと感じる。

台湾の土地、というよりむしろ光景には、日本と台湾の共通点、および差異を探すことで親しみを得た。セブンイレブンやファミリーマートは日本にもあるコンビニエンスストアであり、入店するとおでんや日本の商品が置いてあるという共通点を見つけた。しかし、温めてもらった弁当がとても熱い、レシートには購入した商品が記載されていないなどの、日本にはないものが見られた。これらを現地で探すだけでも、僕の心は充実していたと振り返る。

台湾の文化に関しては、料理から親しみを得た。滞在中には、やけに甘いミルクティーやフランクフルト、菓子パンの中に入っていたカスタードにしてはパサパサしていたもの、うどんのようなスープに見慣れない練り物が入ったラーメンなど、僕ら日本人の口には合わない、色々な料理を食べた。その一方で、アップルパイ、カレーチャーハン、おにぎりなど、日本と変わらない味がする料理も色々食べることができた。海外に行っても、自分にとって食べ慣れた味のする料理を多く食べることができる、それは精神衛生上非常に良いことではないかと現地で考えた。今、台湾滞在時を振り返ると、料理が美味しかったことが、台湾に行ってもよかった、また行きたいという思いに繋がっていると考える。

一方、台湾の人々とは、中国語を使えないと真に親しむことができないと感じた。台南のグループ行動の時、台湾学生交流メンバーが中国語で店員やタクシーの運転手と交渉しているのに、僕はその人たちに「你好」か「謝謝」くらいしか言うことができず、相手に伝えることのできる言葉の少なさを痛感した。台湾現地の人たちに自分のお願いなどを伝えるためには、もちろん中国語を話すに越したことはないが、

せめて中国語を数十個覚えて口にすることができると、紙に書くことができるようにしなければならないと感じた。

今回の派遣に参加して、台湾は食事に困らず、人々は親しく接してくれる良い国で、また行きたい国だと感じた。しかし、中国語で僕のお願いを伝えることができなければ、あるいは僕のパートナーだったローレンスのような、中国語を話すことができる人がいなければ、僕は台湾にいて心が挫けるに違いない。次回台湾に行く時は、事前に中国語を 10 個以上は覚え、現地で使うことをすれば、さらに台湾を楽しむことができそうである。

2. を達成する作業は、文献の調査や事前研修が中心だった。台湾へ行く前に、図書館やインターネットで台湾の親日さに関する論文や雑誌記事、ウェブサイトを集めた。その結果、世代により統治者や教育内容が異なるため、台湾の親日原因も世代により異なること、日本人の勤勉性・誠実性などを美德として尊敬していることを知った。また、事前研修前の課題図書を通して、戦後の国民党政権、二・二八事件による市民の弾圧、戒厳令により、日本統治時代に行われたインフラ整備や教育制度などが「良いこと」と捉えられたことを知った。

対して現地では、台湾の親日さと、文献の調査や研修で得た情報の確認はできても、新たな情報を得ることはできなかった。台北市内の滞在中に行ったスーパーマーケットで、店員が日本語で試食を勧め、商品の相談に乗ってくれたこと、台湾製の飲料品に「甘酸っぱい」「甘熟フレーバー」と書いてあったことから、台湾の日本に対する親しみ、日本を受け入れようとする姿勢を垣間みることができた。課題図書や研修で知った二・二八事件による市民の弾圧、戒厳令については、二二八纪念馆の見学で復習できた。しかし、文献の調査や研修で得た以上の成果を現地で得ることはできなかった。

これは、台湾の人々と接する、人柄や日本をどう思っているのかを尋ねることを自らできなかったためだと考える。東京国際飯店の徐社長や環球科技大学の教授や台湾学生交流メンバーに、お話を聞く機会があったが、自分から尋ねることをしなかった。

「この原因は、自分から相手に話しかける度胸がなかったからである」とまとめることは容易い。しかし、今回の台湾派遣でできなかったことを度胸が改善してくれるとは到底思えない。なにしろ改善法が抽象的であり、度胸度胸と自分に言い聞かせて相手に話すのは心理的負担が大きく、返って緊張してしまい話す内容が出て来ないことも考えられる。

台湾派遣の出来事を振り返った上で原因を考えると、1つは話しかけるという方法に固執していたことが挙げられる。僕が話しかける際に使用できる言語は日本語と英語、多少の韓国語であり、そのうちいずれかが相手に通じなければならない。環球科技大学の台湾学生交流メンバーのアンディに話しかけた時、日本語も英語もあまり分からないらしく、質問したいことをゆっくり話してもその意図を汲んでくれなかった。そのほか、言語が通じても意味が通じない時が多くあった。僕のパートナーだったローレンスはマレーシア出身で、互いに英語が話せるので英語でやりとりしていた。その中で、僕は「マレーシアではサワーソップという果物が食べられている」ことを以前から知っていたので、「サワーソップって果物を知っている？」と彼に訊いたものの、何度言ってもソープのことと捉えられてしまった。

これを改善するには、スマートフォンを駆使する方法がある。僕がアンディに話しかけた後、彼はスマートフォンを出し、翻訳アプリを使って話そうと提案した。これを用いて日本語と繁体字の中国語に翻訳し合い、僕がたまたまGoogle 検索で好きなアニメの画像を出すと領いてくれた時、コミュニケーションを取ることができたと実感した。今思えば、僕はあの時、ローレンスにサワーソップの画像をスマートフォンで見せれば、僕の質問の意図が正しく通じたはずである。

また、絵を描いて見せることは、僕にとってのコミュニケーションの改善策として有効だろう。僕たちが環球科技大学に来た初日、アイスブレイクとして行った絵当てゲーム（小山台と台湾学生交流メンバーの中から1人出てきて、司会から言われたものをホワイトボードに描き、皆がそれを当てるゲーム。描く人は1つ描くごとに交代する。2チームに分かれて行い、先に10回当てたチームの勝ち）で僕が絵を描く番になって、ホワイトボードにタピオカミルクティーを描いた時、すぐに皆がそれと分かってくれた。この時を振り返ると、僕の絵を描くことのできる能力は、相手に理解してもらえるコミュニケーションをする上で、強力な武器になると考える。

翻って、台湾が親日である原因や理由を得る

という目的から考えた場合、質問内容の工夫が必要である。「人柄や日本をどう思っているのか」と言う質問は抽象的であり、私たち日本人に対して付度し「優しい」などのありきたりな回答が返って来がちだと考える。まずは「あなたの好きな日本のものは何か」「日本に行くとしたら何をしたいか」などの、「何」と訊く質問をいくつか用意することが必要である。

今回の台湾派遣の反省をもとに、今後の改善策をまとめると、「海外で『何かを知る』目的を達成するためには、その手段の準備をする」となる。現地で尋ねる質問は、予めいくつか用意しておく。絵を練習して上達した方が、現地で描いて見せた際にその意味を理解してもらえる。2. のような、目的を達成し、海外に行って過ごした時間をさらに有意義にするためには、その手段の準備をした上で、現地で実践したいと決心した。

以上、2つの目的に対する成果、反省、改善策を述べた。その上で、今回の台湾派遣の最大の成果を挙げるならば「自分のコミュニケーション方法の見直し」だろう。

台湾学生交流メンバーとの交流で、自分の英語は、十分相手に伝わるものだと確認できた。ローレンスに英語で洗濯をしたいと伝え、その方法を詳しく聞くことができたことはその例である。

もし、話しても相手が理解してもらえない時に、話す以外の方法を試すことが必要である。サワーソップが相手に伝わらなかったら、“Can I use your phone?” と言って、スマートフォンでサワーソップの画像を見せるという方法がある。僕の好きな漫画やアニメを紹介する際、そのキャラクターを描いて見せれば理解が深まるだろう。

そして、訪れる国の言葉は、前もって数個話しか書くことができるようにしておく。今回の事前研修で、小澤先生が熱心に中国語を教えてくださいましたのに、現地であまり使わなかったことはやはり後悔せざるをえない。その公開を晴らすわけではないが、再度台湾に訪れる時には事前研修でもらった冊子を見て口に出す、そのほかの国へ行くならば、会話集の本を入手して練習するなどの方法を実践したい。

台湾派遣を通して、自分の使用できる言語能力の確認、様々なコミュニケーション手段の発見ができた。この成果から、自分の使用できる言語の中で、さらに多くの言葉を自分のものにしたい、僕自身のことを伝えるためにも、絵を練習して上達したいという願望が出てきた。これからの海外訪問、国際交流は、自分を見直して、成長させる機会としたい。

意識の高い団を目指した派遣記

—団員のみんなに感謝を込めて—

大学3年生

「意識の高い団にしたい」と思いながら取り組んだこの派遣を、この文の中でもう一度丁寧に振り返りたいと思う。そして、私はいつも強がりなリーダーだったが、団員のみんなへのあふれる感謝の思いも素直に伝えられたらと思う。

「意識の高い団にしたい。」私がそう思ったのは今度の台湾派遣のリーダー依頼のお話をいただいた時だった。そしてリーダー就任が正式に決まった際には、「やれるだけやろう。」と思い、不安よりも期待のほうが大きかった。なぜ私が「意識の高い団」にしたいと思ったのか。その背景には、2年前にメンバーとして行った台湾派遣での経験と、その後の中国留学の経験があった。

私は2年前に台湾派遣に参加したときの記憶があまりにも薄い。その理由は、他でもなく事前研修や現地での行動において自分はいつも“意志がなく受け身で、ただついて行っているだけ”だったからだ。今振り返ると、当時の私はそのときのリーダーや財団の方々に任せきりだったと思う。自分にとって実りのない派遣に、自分でしてしまったのだ。しかしそのあと大学のプログラムで参加した1年間の中国留学の記憶は非常に濃い。ただ期間が長いだけがその理由ではない。「中国を丸ごと理解するために現地に溶け込む」という目標のもと、政治や文化、価値観や習慣まで全てを理解すべく意志を持って活動した1年だったからだ。この2つの経験を通して、「ただ与えられた環境にいただけでは意味がない。その環境を生かすも殺すも自分に主体性や意志があるかどうかだ。」ということ強く思うようになった。これを団員に伝えることが、私がこの台湾派遣のリーダーとして果たすべき使命だと考えていた。

第一回目の事前研修で初めて団員たちと顔を合わせた。皆私と2、3年学年が離れておりほとんどが知らない子たちだった。まず私が最初に不安を覚えたのは、結団式の際に自分がスピーチをしたときだった。「意識の高い団を目指します。」私が勢いよくそう話したとき、団員たちの反応はイマイチだった。自分のスピーチが空回りしているようにさえ思った。しかし、2年前の私が団員側に座っていたらきっと同じような反応をしていただろう。それもそのはずだ。ほぼ初めて対面するリーダーにいきなりそのような熱いことを言われても、ついていけないだろう。本当に情けないが、いきなり心がくじけそうになった。次に不安を覚えたのは探求課題の第1回目の発表のときだった。正直どのグループの発表も完成度が低く、何より発表している団員に覇気がなかった。私はここで、「受け身になる派遣が嫌で、みんなの主体性を引き出そうとしているのに、みんなにとっては私に『やらされている』状況になっている。みんなの興味や関心をつぶしてしまったのは自分だ。」ということを知り、ただただ自分のやり方が悪かったという思いでまたくじけそうになった。

そんな中であつという間に台湾へ渡航する日を迎えた。最初の2日間の台北で過ごしたが、最初にみんなの本音が聞けたと思ったのは2日目の晩のミーティングのときだった。話していたのは「SIMカードを持っている人と持っていない人がいるため、個人ができることに差ができてしまう」という問題についてだった。普段あまり話さなかったメンバーは勇気を出して本音を言ったことをきっかけに、みんな訥々と思っていることを口に出し始めたのだ。そこで初めてそれぞれの考え方や個性、また「みんなもっと自分でやりたいんだな」ということを知り、嬉しく感

じたのと同時に、何かこの団が良い方向に向かっていく兆しがみえたような気がした。

本音で話し合うミーティングはその後環球科技大学に行ってから続いた。毎晩のミーティングで、話題の中心は「自分とパートナーとの関係をどうしたらもっとできるか」ということだった。それぞれこうしたかったけどできなかった、これをやってみたなど、時には葛藤を抱えながら、時には達成感を感じながら話しているのを聞き、私は自分にはなかったことや、なくしかけていたものをみんなの中にみたような思いになった。目の前にいる団員は皆、等身大の自分を見つめ、昨日より今日、今日より明日をより良いものにしようともがいているのだ。その様子に圧倒されながら、「焦っていてもしょうがない。自分を見つめ、団を見つめ、確実に一歩ずつだ。それこそ自分に対してとても”意識が高い”のではないか」と強く思った。気づかせてくれた団のみんなをととても尊敬する気持ちになった。

そう思ってからもっと心に余裕を持ち、少し離れた場所から団員を見れるようになった。人の話をよく聞いてから物事を言う子、いつも私のやりたいことを先に読もうと真剣を張っている子、ただそこにいるだけで場が和む子、自分にも他人にも妥協しない子、人の気持ちがよく分かり敏感な子など、本当に多種多様なメンバーがそろっていた。環球ですずっと部屋が同じだった後輩と毎晩いろんな話をしたのもとても良い思い出だ。とにかくとてもよくしゃべる後輩（気を使ってくれてたのかな？笑）で、大学のこと、派遣のこと、恋愛のこと！までたくさん話し、団員の新たな一面を知れるとても貴重な毎晩になった。そんな多種多様な子達が、毎晩のミーティングを通し、だんだんと互いを知り認め合い、一つになっていくのを実感できる毎日は、自分にとってとても刺激的だった。

そして迎えた最後の「さよならパーティ」は本当にそれぞれの個性やアイデアが発揮され、みんながもがいた日々が形になった

瞬間だったと思う。そしてみんなだけではなく、私自身がもがいた日々が形になった瞬間だった。しかし何より団の成長が実感できたのは、日本への帰国後、解団式での探求の発表のときだった。渡航前、私が心くじけたあの経験を挽回してくれるかのように、一人一人が主体的に生き生きと語り、息をするのを忘れてしまうほどその姿に引き込まれた。みんなの堂々としているその態度はとても眩しく、かつこよく、この姿こそ私が目指していた「意識の高い団」の姿だと確信した。本当に感激して感謝の気持ちであふれ、涙が出た。

「みんな色が濃くて、本当は混ざり合ったら黒になるはずなのに、虹色に輝いてしまったような派遣だった。」一人の団員が言った私の心に一生残るであろう言葉だ。今回の活動を端的に表している言葉だと思う。そして私は、「虹色」というのは団員一人一人の心の色だとも思う。そしてその団員たちは、実は心がもろいのに、いつも強がってしまう頑固な私自身の心や、派遣の思い出までも虹色にしてくれたと感じている。本当にみんなには感謝と尊敬の念でいっぱいだ。

いつも強がりな頑固な私は、この気持ちをしっかりと団員に届けられたのだろうか。

みんながいる代で本当に良かった。ありがとう。

